

<研究ノート>"橘の小島"に橘の木はあったか : 『源氏物語』「浮舟」巻の状景

著者	藤井 輝
出版者	法政大学国文学会
雑誌名	日本文学誌要
巻	92
ページ	19-26
発行年	2015-07-25
URL	http://hdl.handle.net/10114/12494

〈研究ノート〉

橘の小島に橘の木はあったか

——『源氏物語』『浮舟』巻の状況——

藤井 輝

一、されたる常磐木

『源氏物語』を読み進めると、人物が、どういう配置でどう動いているのか、具体的な光景を想定しづらい箇所の時折遭遇する。本稿では、『源氏物語』『浮舟』巻の、橘の小島での場面について考えていきたい。

まずは、検討する箇所の本文を掲げる。¹

【資料1】『源氏物語』『浮舟』巻（五二頁）

（浮舟ガ）「いとはかなげなるもの」と、明け暮れ見出だす小さき舟に、（匂宮ハ浮舟ト）乗りたまひて、さしわたりたまふほど、（浮舟ハ）はるかならむ岸にしも漕ぎ離れたらむやうに心細くおぼえて、つとつきて抱かれたるも、（匂宮ハ）「いとらうたし」と、おぼす。

有明の月、澄みのぼりて、水の面も曇りなきに、（船頭ガ）「これなむ、橘の小島」と、申して、御舟をしばししとどめたるを、（匂宮ガ）見たまへば、（橘ノ小島ハ）おほきやかなる岩のさまして、されたる常磐木の蔭、茂れり。

（匂宮ハ）「かれ見たまへ。いとはかなけれど、千年も経べき緑の深さを」と、のたまひて、

（匂宮）「年経ともかはらむものか。橘の小島の崎に契る心は」。

女も、めづらしからむ道のやうにおぼえて、

（浮舟）「橘の小島の色はかはらじを、この浮舟ぞ、ゆくへ知られぬ」。

（匂宮ハ）をりから、人のさまに、をかしくのみ、何こともおぼしなす。

かの岸にさし着きて下りたまふに、（下略）

句宮が、宇治の浮舟の元を訪れ、側近の一人時方に、用意

させた家へ連れて行かせる場面である。その家は、浮舟のいる邸から、宇治川を挟んで対岸にある。句宮は浮舟を抱えて舟に乗り込む。舟には、句宮、浮舟、侍従、船頭と思しき人物、および時方が、乗っていると読まれる。

船頭は、「これなむ、橋の小島」と案内し、舟を停める。もちろん、橋の小島は、句宮らの目的地ではない。対岸にある時方叔父の所有宅へ向かう途中に浮かぶ島である。島には上陸していない。

橋の小島を見ながら、句宮と浮舟は歌を交わし、対岸の目的地に至る。以上のような流れである。

この場面を絵画化・映像化するとすれば、句宮・浮舟・侍従・船頭・時方・川・有明月・小島、そして小島に生える「されたる常磐木」を配置するのが適当であろう。

言うまでも無く、この場面は、源氏絵に多く採用されてきた「浮舟」巻を象徴する箇所である。本文を読み想像するよりも早く、源氏絵の方を思い浮かべる人も少なくないだろう。

ところが、「されたる常磐木」に対する解釈が、注釈書で分かれている。

I 橘の木と解するもの

『新潮集成』・『週刊朝日百科』・『鑑賞と基礎知識』・『新編全集』頭注

II 松の木と解するもの

『評釈』

III 「常緑樹」と解するもの

『岩波旧大系』・『ちくま文庫』・『講読』・『新編全集』現代語訳

すなわち、「されたる常磐木」が、橘であるか松であるか、実ははっきりしていない。

月・舟・男女・川、は、容易に映像化・絵画化可能である。しかし島に生える「常磐木」の解釈には、ぶれが生じているわけである。

橋の小島には、何の木が生えていたのだろうか。そして、句宮の「年経ともかはらむものか。橋の小島の崎に契る心は」は、何の木を指して詠まれたのか。

二、歌語としての橘・松

この節では、橋の小島・橘・松がそれぞれ、和歌に於いてどのように詠まれるかを検討していく。

確認しておくとして、『資料1』当該場面、小島に生える木は「常磐木」という語でしか表現されない。本文上、「橘」と「松」は、いずれも現れない。

まずは、橋の小島について見ておく。橋の小島は、『古今和歌集』初出である。すなわち、

【資料2】『古今和歌集』春下・一二一番歌

今もかも咲きにほふらむ 橘の小島の崎の山吹の花

である。橘の小島の山吹が詠まれている。また、橘の小島を詠む歌は、『道助法親王家五十首』『壬三集』にも見られ、いずれも、山吹を詠み込むものである。

しかし、「浮舟」巻当該箇所「山吹」は登場しない。そもそも、山吹は、晩春・初夏の景物であり、「浮舟」巻当該箇所の二月という季節にふさわしくないことは明らかである。

続いて、「橘」を見ていく。『古今集』以降、次の和歌を本歌とするものが多く見られる。

【資料3】『古今和歌集』夏・一三九番歌

五月待つ花橘の香をかげば 昔の人の袖の香ぞする

これは『伊勢物語』第六十段と共に知られる。吉海直人が「花橘」が単に季節感のみならず、過去の追憶・回想の表象として機能している」と述べるように、『源氏物語』等に出る和歌でも、【資料3】を本歌とするものがほとんどである。

また、歌語としての「橘」は、次のようにも詠まれる。

【資料4】『源氏物語』「花散里」巻（一九六頁）

（光源氏）「橘の香をなつかしみ、郭公、花散里をたづねてぞとふ。

いにしへの忘れがたきなぐさめには、なほ参りはべりぬべ

かりけり。……

「橘」と「ほととぎす」は、共に、夏（初夏）の景物である。ゆえに、【資料4】のように、その季節と「過去の追憶・回想」の性格を取り合わせて、共に詠まれることも多い。

注意しておきたいのは、「橘」が、夏（初夏）の景物として詠まれていること、「橘」といえば「香」であることである。また、「橘」の和歌には、常緑を詠むものもある。

【資料5】『萬葉集』一〇〇九番歌（他出『古今和歌六帖』）

冬十一月、左大弁葛城王等の、姓橘氏を賜りし時の御製の歌一首

橘は実さへ花さへその葉さへ枝に霜ふれどいや常葉の木

【資料6】『萬葉集』四一一番歌・大伴家持・「橘の歌一首」

かけまくも あやに恐ろし（中略）春されば 孫枝萌いつつ ほととぎす 鳴く五月には 初花を 枝に手折りて（中略）橘の 成れるその実は ひた照りに いや見が欲しく み雪降る 冬に至れば 露置けども その葉も枯れず 常磐なす いやさかばえに（下略）

両首ともに橘の木が常緑であることを詠む。【資料6】の歌では、冬は特に、雪と、常磐木である橘との、色彩的な対照を言い、その常緑性を詠む。【資料5】も季節は冬で、「霜」と共に詠まれている。

すなわち、「橘」が、冬に詠まれる場合は、常磐・常緑の性格を取り立てて詠むことが確認できる。冬でなくとも「橘」常磐」を詠むもの（「常磐なる橘」などの言い回し）はある。季節が冬であつてもなお緑の葉を付ける、その常緑性に、永久不變の意味を合わせて詠むものもある。

さて、「浮舟」巻当該場面に戻る。第一節で掲げた注釈書のうち、「常磐木」を「橘」と解すものは、根拠として【資料5・6】を挙げている。句宮が橘の木を見て詠んだとすると、【資料5・6】に見えるような「橘」の性格、つまり常緑・不変性を利用した、と見ることが可能である。

また、【資料5】「橘は」の歌は、『古今和歌六帖』にも載る歌である。「浮舟」巻作者・読者が受容しており、同時に想起できる可能性がある。したがって、第一節で掲げた諸注のうち、「常磐木」を「橘の木と解すものは、たしかに説明可能である。但し、I橘の木と解すものの根拠となつてゐるのは、結局「常磐木」という一語に尽きることも忘れてはならない。本文に「橘が生えていた」とは明言されてゐないためである。

ここはひとまず、「橘」が生えていた可能性もある、として、次の検討に移る。

さて、第一節で掲げた、諸注の「常磐木」解釈について、唯一「松」と解すものが玉上琢彌『評釈』である。但し、『評釈』は、鑑賞欄で、「橘の小島。大きな岩ぐらゐで、常緑の松などが茂つてゐる」（一〇八頁）と言うのみで、なぜ「松」と解釈したかは説明しない。

そこで、「松」の和歌について「橘」と同じように見ていく。「松」

は、次のように詠まれる。代表的な一首を掲げる。

【資料7】『古今和歌集』春・二四番歌・源宗于朝臣

寛平御時后宮の歌合によめる

ときはなる松の緑も春来ればいまひとしほの色まさりけり

「橘」と同じく、「松」も、『萬葉集』の時点から、「常磐」という語と連なる場合が多く見られる。それらの歌は、やはり「松」の常緑性に永久不變の意味を詠むのである。

当該場面の本文には「おほきやかなる岩のさまして、されたる常磐木の蔭、茂れり」とだけある。つまり、「常磐木」は、「橘」と「松」、いずれの可能性も同等にあり得る。

たしかに「橘の小島」という地名に「橘」は含まれてゐるのだが、それは、あくまでも固有名詞である。橘が生えていた、という証拠にはならないはずである。

では、「橘の小島」には、橘か松があつた、あるいは両方あつたとして、句宮が詠んだ和歌は、どちらを見て詠んだのだろうか。換言すると、句宮・浮舟は、橘と松、どちらの常磐木に託して和歌をやりとりしたのだろうか。

三、橘か、松か

ここまで、「常磐木」として詠まれるものは、「橘」「松」いずれも同等の可能性があることを確認した。あるいは、両方が島に生えていたという可能性も充分にある。

本節では、句宮が、「橘」「松」のどちらを指して和歌を詠んだ可能性が高いか検討する。

ここで注目したいのは、【資料1】「浮舟」巻、句宮のセリフ、「千年も経べき緑の深さを」である。

句宮の言「千年も経べき緑の深さを」は、「されたる常磐木」を指す。では、その語に注目してみる。「千年」という語が、何と共に詠まれているかを見ていく。

「千年」＋「松」の例を一部掲げる。

【資料8】『古今和歌集』三五六番歌・素性法師

万代をまつにぞ君を祝ひつる、千年の陰に住まむと思へば

【資料9】『躬恒集』一七〇番歌

我よりもさきにおひにしまつなれば、ちとせののちにあは
ざらめやは

【資料10】『伊勢集』一八四番歌

千とせふるまつといへども、うゑてみる人ぞかぞへてしる
べかりける

【資料11】『貫之集』五二四番歌

千とせといふ松をひきつつ春の野のとはさもしらず我はき
にけり

【資料12】『経信集（大納言経信集）』一七〇番歌

朱雀師ときこゆる人の、むまごの許に、かくありし
みどりなる松にかゝれる白雪は、ちとせふるとぞ、いふべ
かりける

いずれも「松」から、「千年」を導く歌である。尚、「千年」＋「松」は、四〇〇首以上の歌を見いだすことができる。

ところが、「橘」と「千年」とを共に詠む和歌は、管見の限り見つからなかった。

すなわち、和歌に於いては、「千年」と言えば「松」、「松」と言えば「千年」、と詠むのが通例であったと見てよい。

また、のち、散文に於いても、

【資料13】伝為家筆本『狭衣物語』三

きぬのいろぞ、ことにめづらしからねど、「ちよのためしに」
とおぼしめすにや、千とせの松のふかみどりを、
いつともなくかさねさる多さは、こちたく、……

というように慣用句として使う例も見られる。すなわち、「千年」と言えば「松」（＋深緑）、という共通理解があったことが確認できる。

さらに、句宮詠歌「年経ともかはらむものか。橘の小島の崎に契る心は」と同じく、「年経とも」と「松」を合わせる歌も見られる。

【資料14】『好忠集』四二四番歌

まつのはのみとりのそではとしふとも いろかはるべきわれならなくに

やはりこの歌も、先に見た「千年」＋「松」のように、不変の意で「松」を用いている。⁷⁾

【資料1】「浮舟」巻の本文には、「松」という語は出てこない。しかし、句宮のセリフ「千年も経べき緑の深さを」は、当時の作者・読者にとって、「松」を想起させる言葉であつたはずである。

尚、恋歌に於ける「松」だが、句宮・浮舟のやりとりの如く、「松」を男自身に擬え、その不変を疑う女、という形も見られる。

【資料14】『後撰和歌集』恋・五九六・五九七番歌

まからずなりにける女の、人に名たちければ、つかはしける

定なくあだに散りぬる花よりはときはの松の色をやは見ぬ
返し (源信明)

住吉の我が身なりせば年ふとも松より外の色を見ましや
よみ人しらず

この二首を、「浮舟」巻の下敷きと見るわけではなく、「松（色）」と不変性を使った恋歌のやりとりの類型として、見ておきたい。

「浮舟」巻当該箇所には、「松」は出てこない。そして、「されたる常磐木」が、「橘」か「松」か、両方かは、さだかではない。しかし、句宮は、「千年も経べき緑の深さを」とまず言うことにより、「松」を指したものと思われる。

句宮の詠んだ「年経ともかはらむものか。橘の小島の崎に契る心は」は、橘の小島に生える「松」を見て詠んだものと考えられる。「松」という語が持つ不変のイメージを、自分の気持ちになぞらえたものだろう。

一方、浮舟の返歌、「橘の小島の色はかはらじを、この浮舟ぞ、ゆくへ知られぬ」の、「色」も、やはり、松（の緑）を指して、その句宮の詠歌に巧みに返したものだろう。

この場面を絵面化する際には、橘の小島の上に、何よりも「松」が生えている状況を描くのが、最も本文に即していると考えられる。

我々が改めて、場面を絵面化・映像化して捉えようとする時、これまでの解釈の実績では及ばない箇所が、まだ多く残っている。そうである。



法政大学日本文学科所蔵「源氏小鑑」（寛延四年刊本）より

橘の小島に描かれているのは、橘のようである。

注

(1) 『源氏物語』本文は、『新潮日本古典集成 源氏物語(二)(八)』

(新潮社、一九七七年・一九八五年)を使用し、頁数を掲げた。尚、私意により、鉤括弧や句読点を變え、丸括弧内に主語を補っている。

(2) 掲げた注釈書は次の通り。尚、当該箇所特に注を付けないものは載せていない。

『新潮集成』——『新潮日本古典集成 源氏物語(八)』(新潮社、一九八五年)

(3)

『週刊朝日百科』——『週刊絵巻で楽しむ源氏物語 浮舟①』(朝日新聞社、二〇一三年)
『鑑賞と基礎知識』——『解釈と鑑賞 別冊 源氏物語の鑑賞と基礎知識 浮舟』(至文堂、二〇〇二年)
『新編全集』頭注・現代語訳——『新編日本古典文学全集 源氏物語(六)』(小学館、一九九八年)
『評釈』——玉上琢彌『源氏物語評釈 第十二卷 浮舟 蜻蛉 手習 夢浮橋』(角川書店、一九六八年)
『岩波旧大系』——『日本古典文学大系 源氏物語(五)』(岩波書店、一九六三年)
『ちくま文庫』——大塚ひかり全訳『源氏物語(六)』(筑摩書房、二〇一〇年)
『講読』——佐伯梅友『源氏物語講読(下)』(武蔵野書院、一九九二年)

(4)

橘の小島を詠むものに、『道助法親王家五十首』『河款冬』二五四番「あすよりは春のかたみを橘のこじまにちれる山吹のはな」、『壬二集』一六五一番「たち花の小島がさきのたび衣ぬれてぞかをる款冬の花」がある。「款冬」は山吹の異名である。いずれも橘の小島+山吹を詠む。

久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』(角川書店、一九九九年)「橘」項(吉海直人執筆)。尚、吉海直人は、同書「橘の小島」項で、「浮舟」巻当該場面を挙げ、「橘」の木を詠むと解している。

(5)

井上真弓「橘の小島のさきにちぎる心は——過去を照らし未來を誘う「橘」の表象」『国文学』第四五巻第九号、二〇〇

七年七月)は、「句宮の歌は「橘の葉」を歌語とし、愛の約束をした」と述べ、「橘」説をとる。また、「資料6」を挙げて、「句宮詠はこの万葉歌を下敷きに置いているであろう」と説いている。「松」の歌も掲げているが、橘か松かの検討はない。

(6)

また、玉上琢彌は「橘の小島には」おそらく紫式部も行ったことがあろう、と思う。少なくとも、その話を誰彼から聞いたであろう。(中略)だから、ここの記述は、ある程度信じてよいと思うが、現在の地形からは何とも想像しようもない」と述べる。当時の場所については、所京子「橘の小島の崎」の再検討」(『芸林』第五七卷第二号、二〇〇八年十月)が考察しているが、玉上の言うように、実際どのような島であったかという点は、他資料からも特定できないようである。その他、「年経」+「松」を詠むものに、『中務集』一四〇番「すみのえのわが身なりせばとしふともまつよりほかのいろをみましや」等がある。尚、「年経」+「橘」を詠むものは、管見の限り見つからなかった。

(7)

付記1

『源氏物語』以外は、次のテキストを使用した。

・『古今和歌集』——『新日本古典文学大系 古今和歌集』(岩波書店、一九八九年)

・『萬葉集』——『新日本古典文学大系 萬葉集』(岩波書店、一九九九年)

・『経信集』——『日本古典文学大系 平安私家集』(岩波書店、一九六四年)

・伝為家筆本『狭衣物語』——『狭衣物語諸本集成 二』(笠間書院、一九九四年)

・『道助法親王家五十首』・『王二集』・『躬恒集』・『伊勢集』・『貫之集』・『好忠集』——『新編国歌大観 CD・ROM版』(角川学芸出版、二〇一二年)

・『後撰和歌集』——『新日本古典文学大系 後撰和歌集』(岩波書店、一九九〇年)

付記2

本稿は、法政大学大学院「日本古代文芸演習」における発表の一部をまとめたものである。

(ふじい ひかる・博士後期課程二年)